

多数の細胞を同時に
取り扱う世界初の技術に
よる検査機器の開発

エスシー ワールド 株式会社

富山県
富山市高田529番地

2005年(平成17年)設立
076-444-5885

<http://www.scworld.co.jp>



代表取締役社長
末岡 宗廣

細胞（リンパ球）チップによる個々の単一細胞の取扱技術を強みにした、検査機器の開発により、広く医療・健康分野に貢献。

世界初、多数の細胞を同時に個別に取り扱う技術

多数の細胞を同時に個別に取り扱う技術は、世界初の技術であり、従来の方法より時間的・コスト的ロスが少なく、高効率・高精度に特定の細胞を検出できる。これは、大学及び公的機関や地域企業で取り組みを進めた「知的クラスター」創生事業の活用によるもの。

高速・高解像度で読取るレーザースキャナーを開発

約25万個の細胞を個々に充填した細胞チップを、高速・高解像度で読取り、抗原に対する細胞の反応を解析することができるレーザースキャナーを開発した。

知的クラスターと産業クラスター計画の連携による細胞自動回収装置の開発

単一細胞の取扱技術を活用して、細胞チップ上の生細胞を1個ずつダメージなく自動回収できる細胞自動回収装置を開発。これまでの手作業を自動化することにより、研究者の負担を軽減し、技術的個人差を解消することができる。これは、「知的クラスター」と大学、研究機関等のシーズを活用した「産業クラスター」計画の連携による事業成果である。



レーザースキャナー



細胞自動回収装置

株式会社 タニハタ

富山県
富山市上赤江町1-7-3

1998年(平成10年)設立
076-441-2820

<http://www.tanihata.co.jp>



代表取締役社長
谷端 信夫

高度な木工技術と
インターネット活用で
新しい「和」の需要を創造

飛鳥時代より続く伝統木工技術「組子」を活かし、現在の生活に合った欄間・間仕切り・引き戸などを開発・販売。インターネットを活用して日本にとどまらず世界に組子製品を納入している。

「組子引き戸」のインターネット販売が好評

職人でなければ販売（取り付け）することができなかった組子引き戸を個人の顧客でも設置できるように引き戸を開発。ホームページから注文を受け、2週間以内に商品を製作・発送する仕組みも構築。注文建具を住宅の一部材からインテリア商品へと変えることにより和建具の可能性を大きく広げた。

技術・デザイン・機能が融合した組子間仕切りの大ヒット

2001年に販売を開始した間仕切り「組子スクリーン」（2001年グッドデザイン受賞（商品デザイン部門）が2008年11月に累計販売3万枚を突破。和風、洋風にとらわれないシンプルなデザインと機能が業界に新しい風を吹き込んだ。

店舗用の間仕切りが好評

欄間の意匠は古くさい・・・和風建具は衰退産業である・・・そんな言葉を跳ね返すように全国の店舗で組子欄間が使われている。アパレルの店舗、和風スパゲティの店舗、オフィスの内装インテリアなど今まででは考えられない箇所に組子欄間が使用されている。



すべての人に優しいユニ
バーサルデザインドアの
製造

株式会社 ティーアンド ティー・タカ マツタテグ



富山県
富山市綾田町3丁目11番10号 代表取締役
高松 俊郎

1990年(平成2年)設立
076-438-6868

<http://www.oletto-door.co.jp>

独自開発した特殊ギア蝶番システム（セーフティギア蝶番）を使用して、高齢化社会、福祉社会に対応した安全・安心で省スペース、バリアフリーを実現した折戸を開発。介護福祉施設、病院、公共施設などに採用。

開発の背景

高齢化社会の進展とともに、住宅・公共施設などでバリアフリーに対するニーズが高まっているが、手動ドアの分野ではそのニーズを十分に満たす製品がほとんどなかった。若年者には使い勝手のよいドアでも、高齢者には使いづらいドアもあった。

そこで同社では、開口部にストレスを感じさせない、すべてにやさしいドアの開発、省スペースでバリアフリー、誰もが小さな力で開閉できるドアの開発に取り組んだ。

ギアぶれや段差の発生を抑制

セーフティギア蝶番は、プレートをドア本体に直に上下(大、小)逆向きに取り付けることにより、さらに扉と扉を一体化させ、これまでのギア蝶番の欠点であったギアぶれや段差の生じない構造を実現した。

多彩なバリエーションが可能でデザイン性に優れる

プレートを扉に直付けすることで、今までのギア蝶番ドアに必要なだったポール部分にガラス、樹脂、パネルなど多彩なバリエーションの組み合わせが可能となり、デザイン性にも優れている。

指詰め危険を極限までおさえ、ほとんど隙間を感じさせない

家の中で一番隙間の危険を感じる場所はドアの隙間であり、ドアの吊り元側の隙間が最も危険な場所であるという調査結果もある。ドアの吊り元側の隙間は、従来の蝶番では1cm以上あるが、セーフティギア蝶番のドアはほとんど隙間を感じさせず、指詰め危険を最小限に抑えることが可能になった。



株式会社 JAアグリひみ



代表取締役社長
川上 修

富山県
氷見市加納町840-1

2006年(平成18年)設立
0766-74-8735

高機能はとむぎ茶を企画し
はとむぎ栽培を促進

ハトムギの薬効成分を活かして健康志向に沿った高機能なはとむぎ茶の製造、市場展開を促進。

農業と健康飲料のマッチングを図る

氷見市及びJA氷見市が、農家の耕作意欲を刺激し、担い手を育成する戦略的作物としてハトムギ栽培を推奨する中、同社は作物の高付加価値化を図るため、地域の特産としてはとむぎ茶に加工してペットボトルで販売することを考案。3年目の平成20年度では150万本の販売実績をあげ、また、氷見市におけるハトムギの作付け面積が、平成17年度の7haから平成21年度には72haに拡大、収穫量も125トンとなり全国シェアの11%にも及ぶなど、氷見市の農業・飲料事業分野の売上げ拡大とハトムギ生産農家の所得向上に大きく貢献している。

ハトムギの特徴をさらにみがきあげるために

古来ヨクイニンと称して漢方薬に用いられてきた成分を金沢大学医学部と薬学部が中心になって分析し、ハトムギからその有効成分をエキスとして抽出する技術を確認。同社は、他社と共同で本エキスとはとむぎ茶を結びつけることにより現在成長を続けている氷見のはとむぎ茶をさらにパワーアップする新製品の開発を企画。上記研究機関によるハトムギの特殊処理素材を用いる特許を活用し、さらに機能性を高めた製品開発に取り組んでいる。

地域の活力向上とブランドの確立

ペットボトルの販売収益から1本につき5円を氷見市へ提供し、地域スポーツ振興等に有効に用いられている(平成20年度は750万円)。ハトムギを通じて農業技術や農家の育成と青少年育成が両立され、氷見の「はとむぎ茶」が富山県発の新ブランドとして広く知られるよう努めている。



氷見産ハトムギを用いたはとむぎ茶



氷見で栽培しているハトムギ